ほんあづま4月号付録
1977年9月27日第三種郵便物認可　1999年4月10日発行(毎月1回10日発行)通巻第362号

今がチャンスだ

―『とうほん』68号より―

今がチャンスだ

八島英雄

三年に三人のよふぼくを作らせて頂くという目標を果すにどうしたらよいかという事は、いかに未信の人にお道を知って頂くかという問題ではなくて、どうしたら人を助ける誠を育てさせて頂くかと言う問題であろうと思います。

何故かというと、どんな家庭にも又教会にも三年間に未信の人が誰も来ないという所はないと思います。「ここへ来る者喜ばさずには帰さん」という誠の治った所であれば、何も知らずに来た人でも道につながる事が出来るが、人を助ける心がない所では、たとえ外で「匂いかけ」されて、話を聞きに訪れた人であっても続かないと思います。

現在、実際に外に出て未信者と話し合って見ると、家族、親族の中でお道を信仰して居る人が一人も居ないという人は殆んどありません。お道を知らないで信仰しないのではなくて、すでにお道を通って居る人達に未信の人達をひきつけるだけの、人を助ける誠の匂いが出て居ないからだと思います。

まず、「においがけ」、「おたすけ」という言葉の意味でありますが、「におい」というのは、鼻をぴんと刺激するものだと、こうわかり切っているように思いますが、その「におい」にも「匂い」と書くのと「臭い」と書くのとある。大体日本の風習では、「匂い」というほうは、いい「におい」の意味で使っており、「臭い」のほうは「悪臭」などと言って、悪いほうのにおいで使っている。

お道で言う「においがけ」は「匂いがけ」のほうであって、「臭いがけ」では困るのです。いい「匂い」を徐々に移していくことが「においがけ」なのですが、この「匂い」とは別に、「匂わす」という日本語があります。これは言葉や態度でもってそれとなく知らせることを「匂わす」というふうに使うわけです。お道で「においがけ」と言いますのは、ごく軽い一言からでも相手に知らせていくという意味で使われることが多い。「おふでさき」の中にも

いまゝではどんなはなしをしたとても　十五　79
なにをゆうてもにをいはかりや
それゆへにゆめでなりともにをいがけ
はやくしやんをしてくれるよふ　十四　7

とありますように、どんな小さなことからでも話しかけるということを意味しておられるわけです。「みかぐらうた」の中にも、

ひとことはなしはひのきしん
にほひばかりをかけておく　七下り目　1

とありますが、これは、人を助ける喜びというものを、たった一言の言葉からもお伝えさせて頂くという意味なのです。また、

みなせかいからだん〳〵と
きたるだいくにほいかけ　　十二下り目　3

よそから仕事をしに来ている大工さんに「におい」をかける。ここに来る者には喜ばさずには帰さぬという場所が、このお地場、「おやしき」の性質なのです。喜ばさずには帰さぬというのは、一人残らず助けるということです。人を助ける喜びというものを、ここへ何も考えずに来た人にも持ち帰って頂く、これが「においがけ」であるわけです。

そういう意味から、明治二十五年六月四日の「おさしづ」にも、

多くの中に澄んで〳〵早くくみにこんかいなと、水を澄まして待っている、これは千日の間にできたのや、それ〳〵にごった水の処では、一夜の宿もとれようまい、すましているから、それできる、わしがにをいかけた、これはおれがひろめたのやという、これも一つの理なれど、まっているから、一つの理もつたわる。

というお言葉がございます。この千日の間にすましたというのは、「おやしき」を人を助ける心でもってすっきりとすませる努力を三年千日通れという「おさしづ」をこの三年前（22・11・7刻限）に下さっていたわけです。そういう努力を重ねて、「おやしき」に黙って帰ってきた人でも、ほんとうに人を助ける心になって帰れるという雰囲気ができ上がった。それがあるから「においがけ」ができるのだというお言葉なのです。

よく「においがけ」で、外で話しかけたら、感心してその人が教会に来ましても、一ぺんきりというときもある。これは外で話をして、なるほどと思っても、生活の中に、なるほどと思わせる人を助ける喜びがなければ、二度とは運んできては下さらない。お道の「においがけ」というのは、生活すべてを人を助ける喜びそのものにして人の心もひきつけ、つないでいくということが大切なことじゃないかと思います。

「においがけ」というのを、お道の上から言葉で短く言ってみますと、いい匂いが自然に移っていくように、人を助ける喜び、陽気ぐらしというものが、人の心に次々とし み渡っていき、お道の人はいい人だなあと思って頂く、このことが「においがけ」なのです。

また、「お助け」というと、物を持つのに力がないから手助けをするとか、物がないから物を持って行って助けてやるとか、からだが弱いから、からだを強くするようにしてやるとか、そういうふうに相手の望むようにすることが助けというふうに世間では考えているわけです。

ところがお道では、病人や事情の人が望むようにしてやることを「お助け」とは教えて頂いていない。というのは、「からださえ丈夫であったら」と願っている人が、いざからだが丈夫になってみますと、人から嫌われて、よけい住みにくい一生を送らなければならないという人も出てくる。

あるいは財産がないから自分は不仕合わせだと思っている人があった。ところが財産ができたら、よけいに家族の中でいさかいが激しくなったという人も出てくる。

病気の人、事情の人の望むようにしてやる、力を貸してやるのが「お助け」ではないと教えて頂く。

それでは何が「お助け」かというと、親神様は、世界じゆうの人間に一人も残さず、一日も早く、陽気ぐらしを味わってもらいたいと思召されている。その親神様のお心に沿って、親神様の手助けをして、親神様の口となり手足となって一人でも多くの人に一日も早く人を助ける喜びを味わって頂こうと、私たちの誠をもって働きかけること、これを「お助け」と教えて頂いているわけです。「お助け」というのは、一言で言うと、こちらの親切な行ないでもって相手まで親切にしてしまうということです。

ところが、「にをいがけ」、「お助け」というと、私らにはとうていできないという人が相当いると思います。

けれども「にをいがけ」、「お助け」というのは、特別に力を持つ人でなければできないというようなものではない。

一例をあげると、月次祭の日に本部でもって境内掛のひのきしんをやる。ところが実際の仕事は、便所の掃除であったり、はきものを揃えるというような簡単な仕事であったりする。

そうすると、こんな退屈な仕事ではあまりファイトが湧かない、やろうという気になれない。けれどもそのひのきしんの姿をよく考え直してみると、本部に参拝においでになる方は、全部が全部「お道はいいものである、本部に行って人を助ける心にならせて頂きましょう」と考えてくる人ばかりではない。

中には観光バスでもってやってきたり、大ぜいの団体で来たりする人もあるし、会長さんがうるさく言うから仕方

がない、たまには顔を立てて本部くらい行きましょうという人もいるし、親戚の人が一生懸命さそいに来て、行ってやらないと会長さんに顔が悪くなるらしいから行ってやろう、というような恩に着せて本部に参拝に来ている人もある。

修養科にさえそういう気持ちでやってきた人も中にはいるのじゃないかと思う。まして参拝の場合には、そういう方は非常に多い。そういう意味では、お道に対していいものであるとも考えていないし、まして人を助ける心など持っていないという方も多いわけです。

そういうときに、世の中には自分の得にならなければ何もしないという人が多いのに、無報酬でもってトイレの雑巾がけをやり、はきものを揃えるという誠の行ないでもって、一般の参拝の方に、「ここまで見ず知らずの私に親切にして下さるお道はいいなあ」と思って頂いたら、これが「においがけ」なのです。

また自分の家では、はきものをぱっぱっと脱ぎ捨てて上がってしまうような方が、はきものを揃えて上がっていく、ほかの人のはきものまで直して上がっていくというふうな行ないをして下さったら、これは簡単なことであるけれども、やはり人に喜んで頂きたいという行ないをして下さったということなのです。

こちらの真心の働きかけでもって、人を助ける心がなかった人が、たとえ小さな事柄でも、人に喜んで頂こうと行なって下さった、人助けをして喜びを感じて下さったということは、これは立派な「お助け」であると考えさせて頂くのです。

「においがけ」、「お助け」というものは、私たちの心の持ち方一つ、身の行ない一つでもって、特別に何も考えなくても、やらせて頂けるものであるということを、しっかり心に置いて頂きたいと思うのです。

このはきものを揃える、掃除をするという行ない全部が、これみなお道は結構なものだと思って頂く匂いであるわけですが、ただそのすばらしい匂いを持っているというだけでなくて、それをたった一言の言葉をかけるということで、非常に早く人を助ける喜びを伝えていくということ、これは人間が言葉でもって心を現わし合い、語り合うという力を持っている限り、そういうことが多いのです。

ひとことはなしハひのきしん

にほひばかりをかけておく　　七下り目　1

今までこうしてお話しさせて頂いたことは、ちょっと聞きますと、「においがけ」というのは、何か特別にやらなくても、生活だけでもってできていくのだというふうに感じられる面が多い。

確かにその通りなのです。そういうものがなければ、ほんとうの「においがけ」はできるものはない。けれども、もう一つ大切なことは、おつとめの中に

ちよとはなしかみのいふことときいてくれ

というお言葉をお教え頂いている。

ちよとはなしかみのいふことときいてくれ

というのは、子供を生み、育てた実の親が、自分の子に頼んでまで人を助ける心になってくれ、人を助ける喜びを味わってくれ、陽気ぐらしをさせてやりたいのだという切ない思いをして居ることをお教え頂いているわけです。

私たち用木は、おやさまの道具衆であるとお教え頂く。道具衆というのは、親神様の手足となって働き、親神様のかわりにものを言わせて頂く人間ということです。その用木であれば、

ちよとはなしかみのいふことときいてくれ

というお言葉を、そのまま私たちの心におさめさせて頂いて、頼んででも人を助ける喜びを味わって頂きたい。同じ暮らすならば、人を助ける喜びの毎日を送って頂きたいと、たとえ相手が断わっても、一言のお話も取り次がせて頂くことが大切なのではないかと考えさせて頂くのであります。

一言の話というのは、文字どおり一言で終わってしまうことがある。「ごめん下さい、天理教の人間です、陽気ぐらしが理なんです」、それくらいしか言えないでもってさっさと帰ってきてしまう人もある。

自分は平常人と話しているともっと立派に話せるのに、なぜ「においがけ」に行ったらしゃべれないのだろうと、考え込んでしまう人も出てくる。

けれども、よく話せなかったというようなことは大して問題ではないのです。というのは、立派に話せればそれに越したことはないけれども、話せなくともすばらしい値打ちがあるということです。

一言話しすればまだいい方で、よその家に入って黙って相手の顔を見て、持っているパンレットを相手に渡しておじぎして帰ってきてしう。最初の一軒目などそういう人が多い。

この前の三一一期には聾唖者が二人「においがけ」に出

させて頂きました。それこそ黙ってパンフレットを渡して帰ってくるだけです。

そういうように一言の話もできないという「においがけ」がある。

けれども一言も言えない「においがけ」でありましても、それまでの信仰というものは人に教え導いて頂くという助けられていた信仰であったが、今度はそこに人を助ける喜びの味わいというものが現われている。

ものも言えない人が渡しても、パンフレットには書いてあるので、それを読んで助かって下さる人が出てくる。これは今まで助けられていた信仰が、人を導き助けるという信仰に大きく踏み出させて頂いたということで、これが「においがけ」の姿であります。

「黙って渡してきなさい、それでもいいから」、こう言いましても、みんな口を持っていますから、最初の一軒は黙って帰ってきても、二軒目では何か言ってくる。三軒目には黙ってパンフレットを渡すのが惜しくなってくるというふうに変わってくるものです。けれども初めの一軒で二の足を踏んで、どうでも助けるだという心を働かせないと、いつまでたっても人を助ける喜びというものを味わう信仰にはなってこないことが多い。

この「においがけ」、「お助け」ということは、あくまでも人を助ける喜びを味わってもらいに行くのだということを心に置いて頂きたいと思う。「においがけ」というはずかしい骨の折れることをやると親神様がそのうちに助けてくれるのだろうというように、回りくどいことは考えないことです。私のこの言葉で、このパンフレットを渡すという行ないで助かる人がいるのだ、そういう喜びをしっかりと味わって頂きたいと思う。

「お助け」に出てまいりますと、よく因縁通りの人にぶつかるということを聞かせて頂く。

因縁通りの人にぶつかると言いましても同じ因縁というわけではない。お道で因縁寄せるということは、同じ因縁を寄せるということではない。

一例を申しますと、自分の子供が不良になりかけているというとき、その親が、先が心配だから人に預けてしつけてもらおうとする場合、不良になりかけているのだから金ばくつきのヤクザ者に仕込んでもらおうと預ける親はいない。親であれば、まじめに不良を直してくれる人に預けようというのが親の思いです。

この人間は不良になりかけているから、ほかのやくざに会わせてつらい目にあわせてやろうというのは、意地悪な人間がやることです。そんな人は世界じゅうどこにも実際はいない。

ところが親神様は両方の親なのです。この不良になりかけた子供をまじめにするには、ただしゃくし定規にまじめな人に預けたのではかえって反発してしまう。

そこで不良になりかけた人の心も知り、思いやりもある人、その不良を直せる人を探し出す。多くの場合、自分自身が不良から直って今まじめであるという人を探し出してこの子を仕込んでくれと頼む。

だから不良を預けられたら、自分は不良を直すだけに力がついたといようにに自分の因縁を自覚することが大切なのです。

親不孝者を預ったら、自分は親不孝を直すだけの立派な因縁に変えて頂いたのだと自覚するのがお道の信仰です。

悪い人に会ったからといって、おれはやっぱり悪いんだなあといずんでしまうのはお道の考え方ではない。

おやさまが、魂の因縁、場所の因縁、時の因縁でこの世にお現われ下さったということは、同じ因縁の人たちの前に出られたのではない。

おやさまの当時は、われさえよくばいいという我利我利亡者が大ぜい住んでおった。（おふでさき三・33）

その中でたった一人で、人を助けるのが、真の誠であるということを教え、次々と人を助ける喜びを味わわせて下さったのがおやさまの因縁であったわけです。

話をさせて頂くときに一番しっかり心に置かなければならないことは、相手も、私と同じように神様から人を助けると喜べるように長い年限かけてだんだんお育て頂いた人間である、というように思うことです。

それ〳〵口では何を言うかわかりません。けれども、神様は一人残らず人を助けると喜べるようにつくり上げて下さったと元の理でお教え頂いているわけです。

その神様というものがあるかないか、これはまだ信用できない人も中にはいると思う。けれども、どんな人間でも、自分の言ったこと行なったことが人に喜ばれれば気持ちがいい。

また自分の言ったこと行なったことで人が傷つき悲しんだなら後味が悪いということは信じられると思います。それが人間の姿なのです。

人を助けると喜べるように神様からお育て頂いたこの姿を、しっかりと心に置かせて頂く。これはいわば神様から一人一人の胸の中に、人を助けると喜べるという非常に燃えやすいローソクを一本ずつ立派な心としてお育て頂いているのだと、たとえて考えることができると思うのです。

人を助けると喜べるローソクを赤々と燃やす、物がなくても年とっていても名誉が踏みにじられても、どんな境遇の中でも人を助けているとこんなにまで喜べるのだという、明るい炎を燃やして下さったのがおやさまである。私たちは、人を助けると喜べるというローソクに、おやさまの人を助けて喜んで下さったという炎をすっと移し燃やして頂いたら、自分の心の中に人を助ける喜びが燃え上がる。

そうして次に、人を助ける喜びを他の人の胸にどんとぶつけて、相手も人を助けて喜びたいローソクをそこに持っているのだという信念を持って、次々と炎を点じていったら、人を助ける喜びを味わう人が次々とふえてくる。

人を喜ばせるのに、自分のものを人に与えたら自分のはうはなくなるというのが形の上の助け方です。けれども「人を助けると喜べます。」という喜びを人に与えていったときには、みな神様のお蔭でもって一人一人の心の中に立派なローソクが待っているところへ、人を助けると喜べますという炎を次々とつけさせて頂くことになる。

次々と明るさを持っていっても、私のローソクは少しも減っていないということです。次々と明るさの中に育ち生活して、そのくせ少しも自分の喜びは減らずに喜びそのものをふやしていく。そういう姿を一波が万波を呼ぶという言葉でお教え頂いているわけです。

また「にをいがけ」に実際に出させて頂いたとき、外で話しかけてそのままずうっとつながったという人は正直の話非常に少ない。それではそんな骨折ることないじゃないかと言うのですが、それが大いに違うのです。

私のささやかな経験ですが、私がまだ十八、九歳のときにまず最初の「にをいがけ」をやり、路傍講演をやった。街灯がない頃ですから。まっ暗な中で立って話をしていた。

何しろ終戦直後のことで非常に紙の貴重なときに、会長さんにお願いして、その貴重な紙に一生懸命自分でもって文句を考えパンフットをガリ版で刷って、それで路傍講演をやっては次々に人に渡していった。二百枚ほどパンフレットを渡して、みんな教会に来て下さいと言ったものですから、翌日あたりから何人も人が来るだろうと思って期待

して待っておった。

ところが何日たっても一人も来ない。もったいない、こんなに紙をむだにしてとしかられ、廊下にすわってしょんぼりしていた。そのときに考えさせられたのです。

外で路傍講演をし、パンフレットを渡すということは、一見むだのように見えるのです。けれどもそのあとが変わってしまった。と言いますのは、外で知らない人に話しかけるというのは、幾ら一生懸命やってもなかなか聞いてもらえないということがわかった。

今までは役員さん、信徒さんの家に参りましても、教会の息子さんが来てくれたと言ってお客さん扱いで、特別お道の話もしないでふわっと帰ってきてしまった。

ところがよその人に話しかけてちっとも聞いてくれないという思いをしたものですから、今度はそこで聞いてくれる人がありがたくてしようがない。それで今度はすぐ逃げ出さないで、どこに行ってもお道の話をするようになった。

そのあげくが、どこの教会にも古い信徒さんの家族で全然教会に来ないという人がいるものですが、そういう人が次々と教会に参りまして非常ににぎやかな青年の集いができるようになってきた。外に向かって路傍講演をやって、その直接の結果はだれも来なかったが、そのお蔭でもって、今まで知っている人に話せなかった理の話が次々と出てくるようになった。

家庭の中で、どうして人に喜んで頂こうか、どうやって人を助けようか、どうやっておやさまのように助け一条で毎日を過ごそうかと理の話がされているような家庭ならば、これはすばらしい家庭であり、何の心配もない家庭です。

またそこに来た人は、自然とお道のすばらしさに心を引かれるものです。一人が三年の間に三人の用木を育てるという目標を昨年よのもと会長さんからお示し頂きましたけれども、日々自分の家庭、自分のいる教会の中でもって、どうしたら人に喜んで頂けるか、どうしたら毎日人を助ける喜びを味わえるかと語り合えるような姿でやったら、これはわけのないことです。「にをいがけ」というのは、そういうところに大きな効果が出てくるのではないかと考えさせて頂く。

最後に、これは内証の話ですが、古い先生方は、「にをいがけ」というのは非常につらいものとして記憶されているわけです。私も十年ほど前まで「にをいがけの日」には指導員で出させて頂きましたが、支部で出させて頂いても、

聞いてもらうまでにはうんと骨が折れました。

十分、二十分話しても、先方から聞かして下さいと言われなければ、何だか断わられたような気がして、しょぼくれて出てくる。次の家に入ると、しょげて入るからよけい断わられてしまう。そういう姿でほんとうにつらい思いしかしなかった。ところがパンフレット、リーフレットができた以後の「にのいがけ」というものは、黙って渡してきても人を助ける喜びが味わえるのだ、ほんの二十分も話せば、あそこで話もさせてもらったと手柄顔をして勇んで帰ってくるということで、非常に明るさが加わってきた。

ほんとうに「にのいがけ」の喜びというものは今初めて味わえるのです。

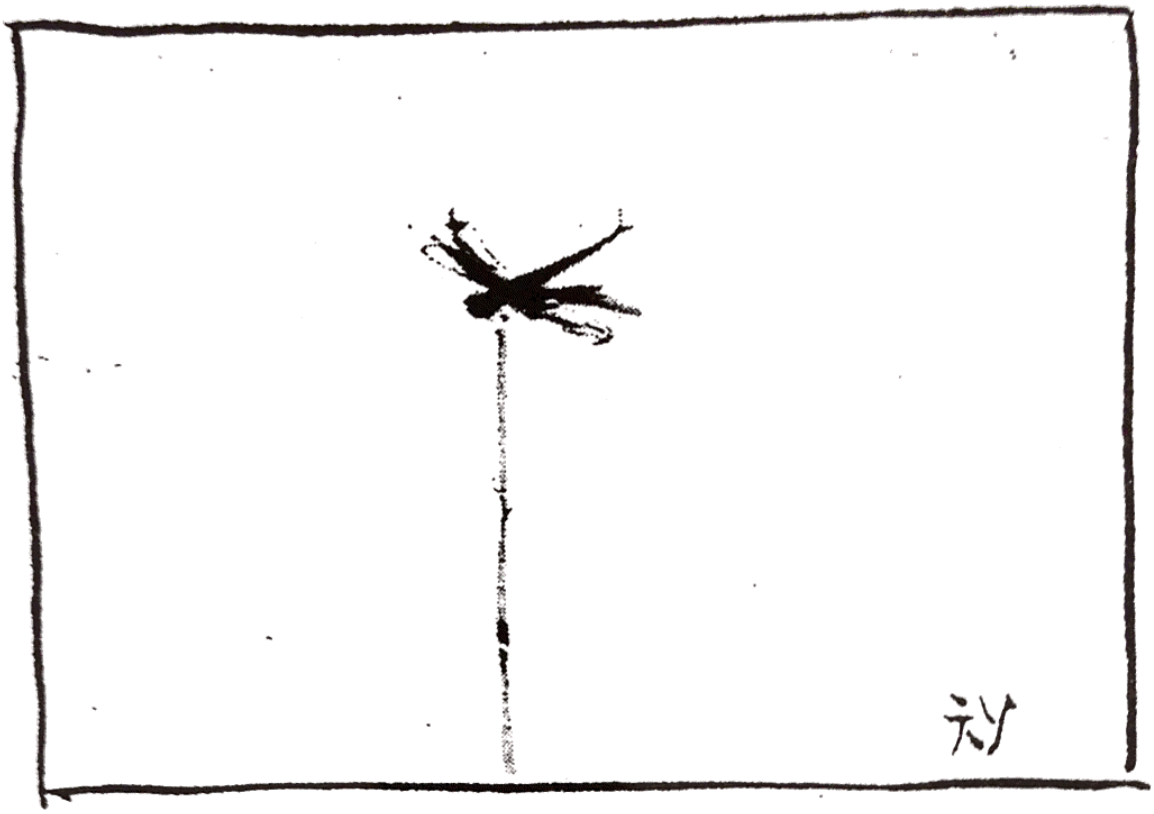
古い先生方は「にのいがけ」の苦しみしか知らなかった。そういうときに後輩である私たちが「にのいがけ」に出させて頂いて、これだけお話してまいりましたと言うと、古い先生は、自分の昔のことをふり返って、あんなつらい思いを平気な笑い顔して乗り越えてくれたのかと言って、みんなの実力を実際以上に買ってくれるのです。

そういう絶好のチャンスが今の時期ですから、先輩先生にこちらを見直させて大したものだと思って頂くのには「にのいがけ」が一番だと私は考えております。

（42・6・10　修養科生匂いがけ実習についてのお話より）

「今がチャンスだ」は『ほんあづま』誌が発刊される以前に『とうほん』誌（昭和四十二年七月十六日発行）に掲載された、「特集　時旬の理の実現を目指して」の中の一文ですが、現在にも参考に資することができると思い、一冊のパンフレットにしました。

櫟本分署　跡保存会
〒六三二―〇〇〇四　奈良県天理市櫟本町三〇七一
TEL〇七四三（六五）四九〇二



―とうほん 第68号―

目　次

表紙カット　吉田潤二郎

巻頭言……田村善蔵…2

特集　時旬の理の実現をめざして……4

1　実績のある用木たれ……中川英子…5

2　道を伝える一考察……丹羽幸一…7

3　今がチャンスだ……八島英雄…10

婦人会東本支部第五十回総会行なわる……20

合同総会（交通安全パレード）行なわる……22

あざやかな御守護……長谷川正巳…24

匂いかけ道中旅日記……玉野博康…31

各部だより……48